

## 創造生活の条件（上）

## 創造とよるこび

仏教で諸行無常ということをやかましく説くのは、一切のものが皆がとゞまることを許されぬので不斷に変わつてゆくということでありますが、それは一面、一切が変化発展するということでもあります。天地は常に積極的に天地そのものを莊嚴し、創造し、発展してとゞまるどころを知りません。花の紅なる、柳の緑なる、全ては、その内部生命の必然の動きに動かされて生々澁刺として、輝かしい相に四季折々の情景を織りなし、綴り出してゆくのであります。もし天地がこの変化発展を忘れてとゞまつたとしたなら、一切は死の状態におかれるだろうと思われれます。

天地すでに創造発展の一路をたどっています。人間に創造発展がなくていいでありましょうか。人生の真の喜びは、かかつて創造にあるといつてもいいと思われれます。私は子供の時、田舎で大きくなりましたが、お庭を造ることが何より好きでした。毎日一里ほどのお隣の村の小学校に通ふ道すがら、心安い小父さんの家によつては、小さい植木や、草花をもらつて来ては、自分の思うように植えて楽しんでものです。岩松はここ、盃葉はここ、万年青はあちらと、毎日岩を動かし、木や草を植え替えて母に笑はれたものです。それをはじめると日が暮れそうでもやめられない。二坪三坪の土地が夜になつても忘れられない。作物などの太つてゆくを見て、お百姓の人はこれと同じ喜びを感じられることだと思ひます。

又田舎にいた頃、よく大人が蕎麦会をやつていたのを思い出します。三四軒がよついで蕎麦を挽きます。そして女がそれを打ちます。雑魚のだしではありますが、たくさん集つて、おもしろく頂きます。そばを食べることよりも、それを作つて頂く所に喜びがあるのであります。それが町では、電話をかけて注文する。十分すれば持つて来る。実に甘味しくはあつても田舎でのような味はない。まして思い出などにならうはずがない。私どもの子供の時、何でも腹は蕎麦でいっぱいになつた。皆で一つ運動して来て食べるのだと、歩きまわつたりして笑いこけたことを忘れていません。それはなぜか、都会の蕎麦にはこうした創造がちつともないのに対して、田舎の蕎麦には、皆で二日ばかりで作つた喜びがあるからであります。

これは一例であります。人生全て創造でなくてはなりません。創造の生活にだけよるこびがあるからであります。そこでこれから人生と切り離すことの出来ない創造の生活について考えてゆきたいと存じます。

## 人生の創造原理としての大行

そこで初めに少し、むずかしいことを申すようではありますが、一体親鸞聖人は、如来による一番正しい生活のことを「往相廻向の生活」だと言われました。往相廻向の生活ということは、彼岸浄土への生活のことであり、成仏への生活のことです。が、いったい浄土に至るといふことは、唯単に時間の経過、又は、地理的里教の移動ということの意味しないのであります。唯、時間的経過又は地理的移動でありますならば、その中には、価値としての向上も、発展も意味されていませぬ。親鸞聖人の領

解をもつてすれば、真実に如来に全的に生きて今日の生活を正定聚と言われ、この因よりあらわれる未来の果を滅度と言われますが、この涅槃の徳が全顕して成仏する滅度と正定聚との間には、必至滅度として「必ず」という必然的関係がある。単に可能であるというのでなく、必然であるとせられました。即ち「無上淨信の暁にいたれば」と、信の一念、正定聚に住することを暁と言われましたが、これよりおせば、法性のさとりを開いて、涅槃の真身を顕す時をば昼とせられるべきであります。暁から昼へは必然であります。一粒の種が芽を切つて、やがて成長して花を咲かすことは、必然であります。因の内奥から、果は必ず生れ出づるのであります。その時、果はすでに因の中に滞在し、内在していたことがわかります。兎に角、こうした必然的に、正定聚から滅度に至る生活を、往相廻向の生活と言われたのであります。

然れば、人生のこの文化的、道義必然の往相生活は、何によつて可能であるかと言いますと、聖人によれば、

「謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり、大信あり。」

と宣言せられました。即ちかかる往相生活には大行大信がある。而してその大行、大信とは何であるかが問題でありますが、それ以前に、聖人は「真実教」を顕示していられます。即ち大無量経をもつて人類の唯一の真実教としていられます。この真実教は、如来の本願を説いて経の宗致とし、仏の名号を経の体とする。大無量経の生命は如来の本願であり、その体は如来の名号であります。そこで、この名号と本願が我等の往相生活について如何なる関係を有するか。

「謹んで往相の廻向を按ずるに大行あり、大信あり。」

と言われた、その大行大信と、先の大無量経の名号本願との関係であります。これを端的に表わさば、

大行とは………名号、南無阿弥陀仏のこと、

大信とは………本願の顕現した相

のことです。即ち真実教によつて、(1)我等は何を信すべきか、(2)如何に信すべきかの問題に答を得られたのであります。何を信すべきかの問いに対しては行巻に「大行」を、如何に信するか問いに対しては信巻に如来の本願のままの大信を説かれたのであります。ですから、大信は如来の本願の顕現であり、その本願の信は、大行即ち南無阿弥陀仏そのものを信するのであるから、大行も大信も、衆生の相対差別の心から生れたものではなくて、如来心そのままの廻向成就する所の他力であります。それ故に、特に「往相廻向」と廻向の文字が使われました。廻向とは、如来それ自身の顕現であることの表明であります。

そこでその「大行」とは何であるかありますが、これについて聖人は、  
「斯の行は即ち是れ、諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり。極速円満す。真如一実の功德宝海なり。故に大行と名く。」

と言つていられます。一一お講義することを省きますが、一粒の種子が一切のものを内具しているように、あらゆる善法、徳本を具撰して、極速円満、欠ぐることなく成就された真如そのままの絶対価値、即ち「真如一実の功德実海」だと言われたのであります。

即ち名号とは、道義的、文化的絶対価値の表象であります。生ける如来そのものであります。この絶対価値たる如来そのものをぬぎにしては、往相生活はないのであります。大行とは南無阿弥陀仏それ自身であつて、如来仏果正覚の全体であります。この仏果の全体が、衆生の煩惱中に一念獲得された時、衆生は、正定聚の菩薩、即ち因位の相、即ち限りなき未来を有する創造不退の往相廻向の人となります。如来の大行の果なくしてどうして因位創造不退の菩薩道があらましよう。この菩薩道こそは如来の大用によつておこる光明摂取の妙用であります。

仏を、体と相と用との三方面から考えることが出来ますが、華嚴經によれば、仏の体を、大方広と言ひ、用を華嚴と云ひます。大方広というのは、普遍、廣大、永遠、常住なる法身のことでありませぬ。一切の仏、菩薩は全てが、この普遍（何時で何処でも、何の上にも実在するもの）廣大なる法性真如より生まれぬものはありませぬ。仏はこの法性法身を体として正覚し、更に仏自体の妙用として、大菩薩道を展開します。その大菩薩道のことを華嚴というのであります。

華嚴ということをご来「因の万行の華をもつて、果の万徳を莊嚴する」と解釈されてあります。

因の万行の華をもつて……………華

果の万徳を莊嚴する……………嚴

ここに朝顔の種子があります。これは、長い間作られた朝顔の果であります。その種子は色々の尊い徳をもつていますが、その果は果のままでは決して尊いことはありません。花が咲いた時、種子ははじめて果の徳を現わしたのであります。その芽、葉、茎、花などは、果より生れた因の相であります。その因の万行の花が、果の持つてゐる万徳を美しく莊嚴するのであります。そこで

因の万行の華をもつて……………

果の万徳を莊嚴する……………

ということがのみこめたと思ひます。因位の相があらわれてのみ、仏の果の徳は莊嚴されるのであります。果位を仏というに對して、因位を菩薩というのであります。この因位の華である菩薩こそ、仏の浄土を莊嚴するものであり、その菩薩こそは仏の生命に生き、血をつぐ眷族であります。而して、かかる菩薩は仏果からのみ生れて来るのであります。ですから天親菩薩は、

如来淨華衆 如来淨華の衆は

正覚華化生 正覚の華より化生す

と讚嘆せられました。如来の正覚より生れた菩薩たちは、限りなく如来を憶念して、菩薩たる事が出来るのであります。

南無阿弥陀仏は如来正覚の全体であり、この南無阿弥陀仏の果より生れた者が、往相廻向する正定聚の菩薩であります。この正定聚の菩薩は、無限の未来にむかつて、因位の相のまま、限りなく如来にむかつて生きます。この如来にむかつて生きる相

こそ、往生浄土とか、願生浄土とか往相廻向とか言われるのであります。莊嚴浄土の菩薩、即ち、真実の創造生活に生きた人であります。

唯、南無阿弥陀仏の不行によつてのみ、この往相の生活、莊嚴浄土の生活はあり得る。故に、大行こそは真人生の創造原理だといふのであります。